



シニア
ペットと
暮らして

日々、長い時間を一緒に過ごしてきたペットたち。
 ずっと一緒に暮らしてきたからこそ、たくさんの思い出があって、
 笑顔や勇気、元気をもたらしてきた。
 そんなシニアペットとの暮らしをエッセイとして
 綴っていただきました。

※ 掲載の動物医療に関する見解はすべて個人の体験談や感想であり、内容の正確性を保証するものではありません。



妹はおばあちゃん

公募／望月麗
ミルクちゃん・13歳



我が家に来たころ。ここから一緒に成長する。

「後から生まれて来るのに先におばあちゃんになっちゃうのはだーれだ？」

10歳の頃だったろうか、一人っ子だった私に妹ができた。

初めて来た日、一緒に写真を撮った。幼い私に抱っこされる小さなイエローのラブラドルレトリバー。ぼやんとした表情、抱き上げられ垂れたしっぽと大きなお耳。「お花屋さん」

の紹介で、我が家にやってきたのだ。

我が家で迎えた生き物は、ハムスター、ハムスター、ハムスター…歴代5匹が庭に眠る。

ずっと犬と暮らしたかったが、サンタさんをお願いしたら、翌朝枕元にあったのは『犬図鑑』。

夢が叶ったのはそれから数年後だった。

生き物と暮らす中でいつも恐れるのは「この

幸せが終わってしまう日」が来ることではないだろうか。

いつか、人だって死ぬ。平穩に過ごすことができれば、老いたものから順番に。

ところが犬猫はどうだろう。

10年も家族として過ごし、後から来たのに先に歳をとっていく。ハムスターの1、2年だって辛いのに、まして10年も一緒に過ごして先に死んでしまうなんて。幼い日に考えたクイズは、口にしたら認めてしまう気がして、ずっと言えないままだった。

妹とはいつだって分け合った。

アイスクリームは手に取って、古くなったタオルは結び目を作っておもちゃ代わりにして。

何をあげても全力で喜ぶ、サプライズする側からすれば、こんなに嬉しいターゲットはいない。

だが、年月を経て喜び方も徐々に変わっていった。

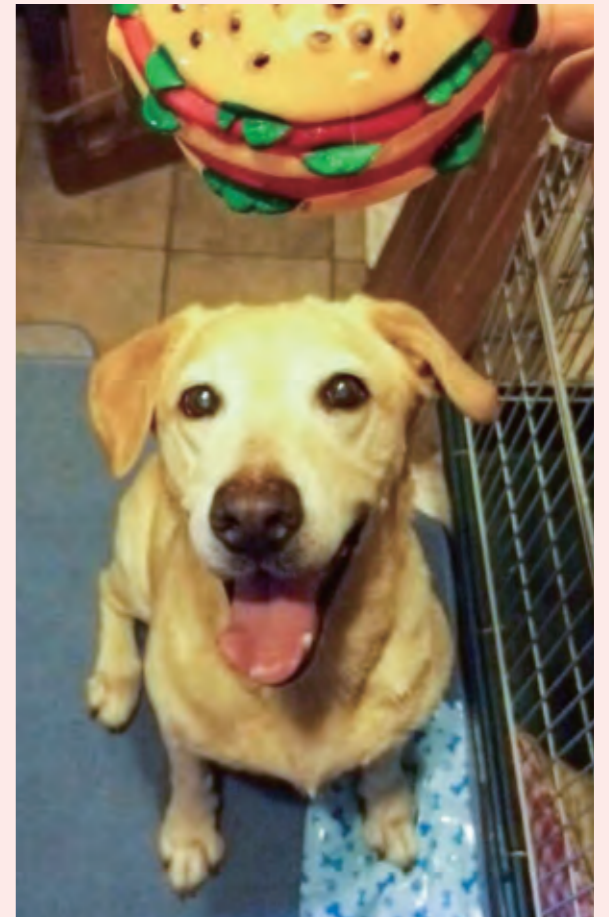
8歳過ぎればシニア犬、振りすぎてぶつけていた尻尾の可動域は狭く、食べ物は相変わらず好きだったが、おもちゃへの興味はなくなった。いつか終わりが来る、そう予感した。

私の不安の当たる日が来た。

あと2ヶ月で12歳になるという頃、妹は動けなくなった。心臓に水が溜まっていた。「助かるか分からない」という前置きのもと、動物病院で処置を受けて家に戻った。

知らせを受けて帰省すると、妹は痩せた体を横たえていた。麻酔は切れているのかいないのか、うっすら目を開け身動き一つしない。その夜は隣に布団を敷いた。

翌朝、目に少し輝きが戻った。垂れ耳をめぐり、おーいおーいと話しかける。反応はいまいちだったが、「じゃあ大好きなアイスでも…」と



遊び盛りのころ。おもちゃを前に目がキラキラしている。



シニア期。穏やかな表情も愛おしい。

言った瞬間、動けない身体はそのまま、頭だけムクッ！と起きあがった。母と涙が出るほど笑ったが、嬉しさ半分、寂しさ半分だった。

その日から約1ヶ月、介護生活が始まった。ずいぶん痩せて頭もとんがってしまった。

「危ないから抱っこしちゃダメ」と言われていたのに軽々抱っこできるようになったのは、私が大きくなったのか、妹が軽くなったのか。

昔、家族がしゃがむとおんぶして欲しそうにじゃれてくることがあった。シニアになってようやく抱っこもおんぶもしてあげられるようになった。

亡くなる数日前、知り合いの「お花屋さん」に挨拶しようと出かけた。お花屋さんは妹を引き

合わせ、成長を見守ってくれただけでなく、お店の看板犬「びーちゃん」「はなちゃん」が先輩犬として遊んでくれた。2匹は黒のラブラドルトリバー。はなちゃんは1年前に亡くなっていた。

お花屋さんは、着いてみると休業日だった。せっかく来たからと、すっかり弱った妹を抱えて車から降りた。すると…なんと花いっぱい駐車場を、妹はトコトコ歩き出したのだ。母がピンクのハーネスとオムツを支えると、嬉しそうにっこりハアハアして。

後で分かったが、その日はびーちゃんが亡くなり店を閉めていたらしい。

あの時、きっと、見えないびーちゃんはな

ちゃんが、遊んでくれていたんだよね。

シニア犬と過ごして気がついたのは、世の中では子犬が目引く一方、同じだけシニア犬と共に暮らす心優しき人たちがいるということだ。

ある夜、道を歩いているとゴロゴロとカートを押して散歩する人がいた。すれ違い様にちらりと見ると、身体が不自由なのか、横たわっているが嬉しそうに景色を眺めるゴールデンレトリバーがいた。

またある時は、外出先の休憩所で小型犬を連れて人がいた。何となく声をかけ、話をするうちにその人が胸元からペンダントを出した。小さなカプセルの中には、先代犬の骨が入っているのだと言う。「ずっと前に亡くなった犬だけれどこの悲しみは何かに代えられないし、代えなくてもいいんだよ。」

一緒に暮らし始めた頃は、いつかシニアになること、いつか死んでしまうことが怖くてたまらなかった。

でも、それは違った。

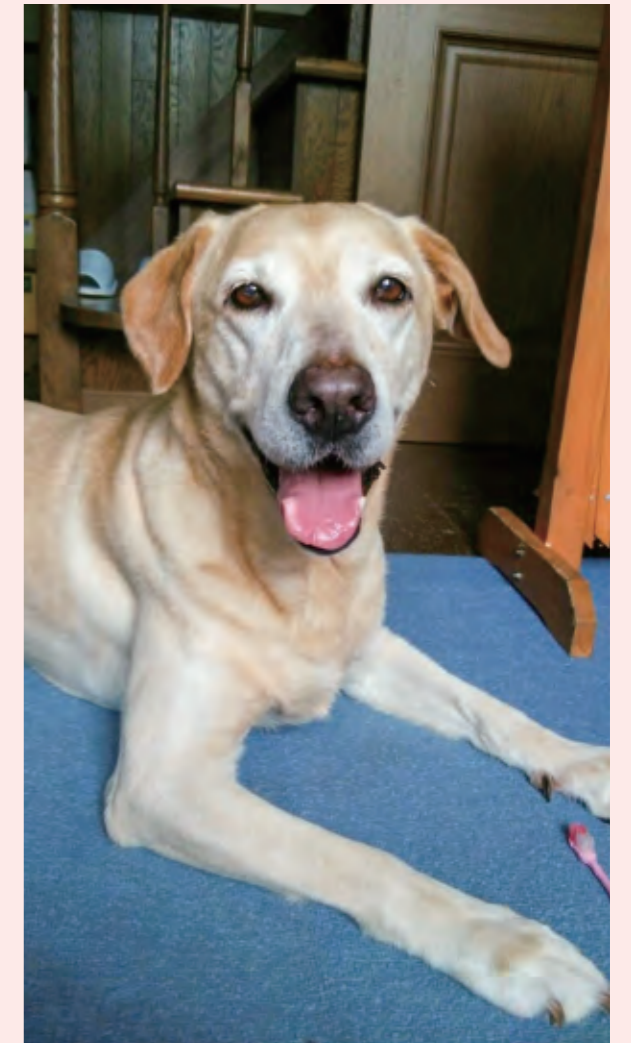
亡くなって5年経つ今でも悲しみは消えないが、写真を見返すたび、家の中で彼女の痕跡を見つけるたび、愛おしさがどんどん増していく。

犬は、その愛くるしい存在感で最期の時のその先まで一緒に過ごしてくれる。なんて最高のパートナーなのだろう。

今は生き物を飼うことができない状況だが、環境が整い責任を持って最後まで寄り添える時が来たら、また犬と共に暮らしたい。

どちらが先に歳をとっても、かわいい弟妹に間違いないのだから。

冬は毛布たっぷりの部屋でぬくぬくと。



「歯磨きできたよ!」の笑顔。

幸せノート

公募 / Y・K
ロロちゃん・13歳



ロロ11歳8ヶ月。病気が見つかって2ヶ月後。目が合うと目を細めてくれます。幸せを感じる瞬間です。

ロロとの出会いは12年前。父の知人のついで我が家にやってきた。小さな小さな雑種の三毛ネコ。子猫を飼うのは初めてだった私は、見た瞬間に「かわいいー！」と叫びそうになった。だがその言葉は、その子の第一声により最後まで発することは出来なかった。

「にゃあああ……！」想像していた子猫のかわいい声とはかけ離れた大きなだみ声に、私は一瞬凍り付いてしまった。よく見ると、鼻の横に茶色い染みのような柄が付いている。はな

そみたいで、かわいくない……私の中の子猫への期待はみるみるしぼんでいった。

ロロは4姉妹だったそう。この子が選ばれた理由は「一番元気だったから」。他の3匹が大人しくじっとしている中、この子だけが飛び回っていたらしい。ロロらしいなと思う。

ロロはその活発な行動を支えるように毎日よく食べ、どんどん大きくなっていった。普通のメス猫より一回り大きく、オス並みの体格、筋肉質でがっしりしていてかっこいい。性格

は、臆病なくせに好奇心旺盛で何にでも興味を示し、お転婆でいつまでも遊び心を忘れない。

私が廊下を歩いていると後ろからやってきて、すり抜けざまに前足でポンと私の足を叩いていく。そしてさっと前に走り込んで振り返る。「追いかけてこしょう！」そんな風に誘われたら、乗らないわけにはいかない。「よーし！」と私は追いかける。いつの間にか途中で攻守が交代して、最後には私が捕まり、「捕まえたからご褒美をちょうだい。」となる。ロロはお皿の前まで私を先導し、到着するとかしこまったように座り、私を見上げてぺろりと舌を出す。いつもロロの勝ちだ。

確かにロロは美人ではないだろうけれど、純真でとてもかわいい。最初は驚いただみ声も、聞けば一発でロロだとわかるし、鼻くそのような柄も、絵を描く時にロロのチャームポイントになる。みんなロロだけの特別な個性。

シニアと呼ばれる年齢になってもロロは相変わらずで、食欲も旺盛、鬼ごっこに誘われる毎日。私はずっとロロをシニアとは認識していなかった。ずっとこのまま一緒にいられるものだ、漠然と思っていた。

11歳の冬、突然食べなくなってお医者さんに連れて行くと「慢性腎臓病」だと告げられた。治らない病気。10歳を過ぎた猫の10%が発症する、猫の宿命のような病気だと。見つかった時には大分進行してしまっていた。

私は後悔に泣いた。無知だったことに。腎臓病は早く発見することが大切だ。知っていたら、シニア期に入るなり毎年検診を受けさせていた。もっと早く発見出来ていたら……。

ふと後ろを振り返ると、そこにロロが佇んでいた。無言で、ただそこにいてくれる。猫を飼っていて、一番幸せだと思う瞬間は、私はこの時

だと思う。ひとりじゃない。「ひとりにならないで……。」ロロにそう言われている気がして、私ははっとした。

私は泣いていた。ロロとお別れするのが辛くて悲しくて。でもそれは、ロロのためではなく、自分のために泣いているのだ。私は、ひとりになっていた。馬鹿だったと思った。でも、今泣いていたら本当に馬鹿だ。ロロはまだ生きていますよ……？まだ出来ることがあるよ。

私はロロとの残りの時間を大切にすため、ノートを付けることにした。1冊は飲んだ薬や



ロロ4歳1ヶ月。寝ている姿もアグレッシブです。どんな夢を見ているのかな……？



ロロ6歳10ヶ月。靴下入れの箱が壊れそう……。箱を見ると入らずにはいられない、箱が大好きな箱入り娘です。この美しい三色の毛色も自慢です。

食べた物、日々の体調、お医者さんに質問することなどを記す「ロロ観察ノート」。もう1冊は食べた物、飲んだ水の量、嘔吐や排泄などを時系列に記す「ロロ食事ノート」。そしてもう1冊は、「ロロ幸せノート」。

ルールは過去と比べないこと。出来なくなったこと、しなくなったことを数えるのではなく、今日出来たこと、してくれたことを見つけること。今日の嬉しかったこと、幸せに感じたことだけを記すノート。

ロロは13歳になった。腎臓病のステージは進み、食欲が減退した。ご飯を食べてもらうのに苦労することになるとは以前は思ってもみなかった。ダイエットの心配をしていた頃がおかしいくらい。体重は減って、隆々としていた筋肉も薄くなった。もう追いかけてこに誘ってはくれない。尿毒素の蓄積から心臓の機能も弱ってきて、1日の大半をじっとうずくまり寝ている。

だけど、毎日ノートには幸せが綴られている。目が合うと目を細めてくれた。なでるとゴロ

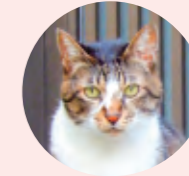


ロロ13歳0ヶ月。ちょっと不機嫌そう。でもこんなロロもかわいい。チャームポイントの“はなくそ”も素敵でしょう？

ゴロと気持ち良さそうに喉を鳴らしてくれた。コロんと丸くなってお腹を見せてくれた。家に帰ると出迎えて「お帰り」と言ってくれた。抱き上げると暖かくて、胸がいっぱいになる。ロロの小さな頭に頬を寄せる。ああ、幸せだな……！

ずっと当たり前だと思っていたことが、こんなにも、当たり前ではなかったことに、ロロは毎日教えてくれる。命を輝かせて教えてくれる……。

私は今日も、当たり前ではない「今日」をロロと生きている。



この度はたくさんのエッセイをご応募いただき誠にありがとうございました。

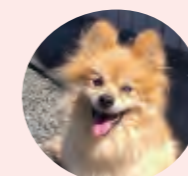
「シニアペットと暮らして」でご応募いただいたエッセイの一部は、ご長寿ペットフォトコンテストのWEBサイト上でもご紹介しております。

シニアペットと暮らしている皆さまだからこそ読んでほしいペットとのさまざまな出来事や思い出を綴ったエッセイをぜひご覧ください。

こちらから
読めます



<https://www.animalabo.com/gochouju/essay/>



お腹を見せて寝転がるロロ。この後私の顔に向けて前足を伸ばしてきます。どうやら私がロロの喉をなでてあげるのを逆に私にしてくれようとしているみたいです。爪がちょっと痛いけど、その気持ちが嬉しいです。

※ 掲載の動物医療に関する見解はすべて個人の体験談や感想であり、内容の正確性を保証するものではありません。